語林類葉

なに　十二

ホ 2
502
12

門 ホ102
號 502
巻 12

早稲田大學圖書

語林類葉巻之十二

清水濱臣輯

奈行 なの部

一言

名

拾遺雑賀子をゑなきにつけて 下略 元輔 ○ 栄花 こまくらべ
十三下 みなさし ○ 住吉の大臣殿のなしるにめたちさへと
いはるゝ名もありうへおもはしくありてちゝ臣とつよ女をいはり
○ 竹取 其名はほゝゑんまうといふて 仙女名也 ○ 続世
継 ゆゑの記 自他君とよばれ名つけゆきへし ○ 同 堀川のうまし

あやつちといふ女房の○同 かきつらね いろえを 祝緒 あや
きく らうし君 ○同 むかしの人集 百良 らうし名 摩尼君○金葉
言下 きゝひらそといふしるとなり○堀河 ともしけく
一品の宮の法師のひとへをかしき やさしき ちとせさき すゝ
きみにあはき 仰とて海 つけさせ給ふ○画人常則 渓 堀河院
ミウ 色なきに 堀 余り見け 堀 ○実方集 女ノワラハノ 名
せき 今の人○同 よ河や 女 下仕 ○同 おそきみ○袋中子
壬生忠見幼名 ちゐ○うましき いとへを 祝緒 続世
継 宇治の川風 ○

二言

あぎ 海ニイハスシテ空ニイヘリ○風ニハ常ニイフ

万代釈教 色即是空々即是色 皇嘉門院別当

ふしれくちきなる きのわさ みどりも かしき いろとみるそ そめぬる

○

哭(なきなき) 万十二

見かは日かにちよにしわきみどりの秋ゆきを いつかはそらく い

○保憲女集 詞 人こもぬ言 仰いかも○続世継 の苑

あるし ときのちの 仰とい○今昔廿五 十一 童泣ニナリ

フハ糸鳴呼ナル フニハ非スヤ○同廿八 一 廿 マ

夜ナキ
コヒナキ
ヨロコヒナキ
童ナキ
舌ナキ

メヤカミ六借ラセ給ヒケレハ殿上人共皆舌
巻シテ此ヨリ後ハ不咲マシキ由ヲ云契テ
ケリ○後撰二 しとみの内なるなをきくせしき
ねてこそきけ○夫木卅五○

ハシタナク
イワケナク
ウシロメタナク
ユクリナク
冥加ナク
イトケナリ
アラケナク
コチナク

果なく ナクハ助辞也

万廿 廿五 下 そきた多くも おきころ成きこうも○源白 そき
なかしいりたれんとくまし なる

イラナリ
ツコハカトナク
オキロナキ
ーーの笑
ーーの衣
ーーのなき

あけ

古今 春下 素性
いさゝふいまはしに南見れん全魂あけの花のくの山あかん
古代 恋二 後如女
かくてあほえぬもの成し玉かをのあたに成あけのちきりなかりに
続古恋
け のし ハ
○濃 蓬生 あけの浦なきしあても○同 上 若菜 あけの衣を
もうけ一こ成んとせあるいあほろけの事にもあり○同
宿木
あけのなきしにねともいしふまし
後撰 恋四 なき人ありに
こ成葉いあけ成る ねとよこれうつ思えぬをみいは君もとまるん
兼盛集
この紫をとあけ成るねし思ひせん なれい人成つくしもあるむ

六帖
ゑひとえあけのかへしも思ふらん　思ひぬ人にかゝるよのかは

○

イトヽナホ
イカテナホ

なほ　イヨ／＼ノ意ニ用ヒシ例

千雑中　藤原良清
思ふたしあるめこゝの歌枕は なほ山かくし人もとむなる

伊勢集
いそかはるえふたるはほかけの井なりとも 猶そふきわきまへる

後撰秋中　躬恒
ちさは[illegible]へし白露 秋のむすしのはつ露なるもなほもつゆしきかな

盛衰記四十二
名にしおふ須磨の浦の月影と 卿なりなほくもる哉

此歌菅家の作とありけに出たるにつ考へし

拾五五
なほもなほ思ふにあかぬ遠くなり 関の清水そ人ぞ[illegible]き

新拾恋五　為世女
いとはうきにつけてそおもふにもいかゝあはる人のつらさは

新後拾恋　清寺国道
いとなほ大海遠く隔たる浦のたしのおもひ[illegible]

同恋二　後二条院
いと猶あけらん名見ぬ遠としえて人ゆき[illegible]の萬の名所は

同雑上　参議法師
猶ふかく山なり山を尋ねてそきてしかし奥もたつねん

新続古雑上　資藤
いと猶下なる[illegible]ゆふ池名の 嶋[illegible]うきほも雨にわたる

同雑中　後小松院
猶ふかく思ひもいとゝ山里は猶もきつけ世とも[illegible]

同春上　藤原良経
いと猶あま[illegible]も[illegible]の月[illegible]人[illegible]に

拾遺雑林
いふて猶あしろのとゝきにいとなん何にきて[illegible]

○

ナホ〜シ

なほ 九
拾遺雑春 さきし時なほこそ見しかもゝの花ちれはをしくそ思ひなりぬる（たゝ人をには）
○源 梅枝 ちくせのまかうきよかて なほ〳〵しきことにあ
くてれたくいともちひに人よろきなりとそ云○同 蓬生 人
なかしなほ〳〵しき清ちをもみえさりける○

ナマシック
ナマワカシトホリ
ナマ女房
ナマ夕暮方
ナマ懐アル
ナマ名僧

なま栗 十二
狭衣 一 下七 うせにしたゝのなまめそく○源 夢 ちきらい
人のほりけれといふへきなちみやあつらん○同 末つむ なま
女房れともえなまけて○今昔廿八 十六 生夕暮方ニ
房ニ成テ○同 同 四十一 生夕暮ニ成ヌレハ○同廿
九 四 生夕暮ニ○同 同 五 生懐アル法師有ケリ○
同廿六 廿二 京ニ生名僧ニテ人ノ請ヲ取テ行
世ヲ渡ル僧有ケリ○源 宿木 なまかうんとなま
くるしく なほなまみ○大和物語 なまくらきなりに○同
なまいとみて時々物れといふる人の○同 なまさふらひ
なましき旅のほとなりきも○大鏡 序 なまさふらひの○
同 なま学生につかうまし○源 初子 なまけやけしとなほ
なまへの絵る人のうちなかりまして○同 少女 なま心やま
しき所かた○

ナマクルシク
ナマクラキ
ナマイトミ
ナマニヒシク
ナマザフラヒ
ナマ学生
ナマケヤケシ
ナマ心ヤマシク

なゐ 地震
萬葉 荒山 廿五 なゐふりきまして○

なり 形○姿
萬葉 十五 えもて必見 女房のなりふり○宇都保 印 なかの院 下 古 ふきあけ
ふりこゝろもきよらけく○源 宿木 さふらふ人々のなりまで
あかりなり姿○同 同 ところへのなりあさやかなりぬれ
くせ所なり○枕冊子 三段 なりはよくなしかえほどころも
うちみなまうなりをかしもあるかの○

なれ 汝○非情ノモノヲモサシテイヘリ
十五 実家 うきよりはなれまたに君か来ぬともなかぬめ枕なりとも
○

ないけ 三言
狭衣 三十二ウ 気○ナキヲ音便ニテナイト云ヘ
時々はないけはあらませまへとて○

ながめ 詠

枕冊子 卅八 陰 かうやうにうちゆかうえてみそうたし おかうえ
てゆかうえともおゆるえし 〇 長明無名抄上 かうり
のえしういゆうらち月をえてとやししかうえいてうき
しうえ 〇 今昔廿七 廿八 コホレテニホフ花サク
ラ哉ト長メケレハ 〇 挟衣

かき衣 哭寝
業花 日落葭 新古哀傷
あかき事をたいゆき衣の着ゆしていゆかい君をとはいみそへき
も
〇 源 若菜 よにおそしてゆき衣のふしくゆしかひゆ 〇

かざし
六帖
うゆしとえるゑいてに梅の花のかざりにをしてむいあしぬ
〇 玉勝間 山かざりは近世にいふかざりの意に ゆるえ ゆる
新古雑上 雅経
かきしてみしいかざりのあと

かさろ
塩石海路 丈木廿三同
よもゆくうくつゆきして漕ゆいおきのかさろをかつなゐ
〇 散木 六 悲歎部 むろにい日さろそゝ侍りて ゆるしくい

てらすき汐ほとにあさくら籾ゐかしとてさきとるをみて
あさくらハさきをとらりし気比の宮のみちにさちもふる人
○同 かほへといふ所にて風吹けれはあさくらとやらの名川
といふきらくをきゝてその神にこそくゝ祈りけるとこの
きつけゝる

山家集下
さのくやい人かはゆきをきてはの名川いかほへのあさきをみる

同
あさら嶋せとのあさくらい寄くとも塩はにかしとるかしもや

新六帖 信実
いそにをる浪のけしきもあまにあさくらやるくらく

山家集 をうけてしやしも立
はふい文あさくらくとせ風をめて空それ浪をきつあされさき
家をハみし唄り沖にふき出てあさくら名川こよ海士のつま家

夫木卅三
散木
あさ川風ふけ芦の浦のはましきにあさくらとともに千鳥名川さ

夫木十七千鳥
云々集 入道大納言定頼
あさ川風をまに吹しあにをる和泉のきみのひとり不出て
あさ川さいふけてあさくら名川く

○新古今 指句
浪そ名降るとて

字彩 吹上上
さしさそい嵐の風ハふきあへぬ川あさくらにこゆる浦

○催馬楽 紀伊国
風しもふけ名きいあさくらしもこそ
え浦をきまりてをまその名海こえけ○梁塵抄 あさい
あさい風名之あさくらと同○ナコリ本語ニテナコロ
ハ後嫁ノ風ノ夕チニア
トニタツ浪ト云言ニテ餘波ヲモナコリトヨ
ノルセナレハ風トスル説ハ非也催馬楽及散

木きのうちハノ哥ノハミカキニテモミルハミ又
ナホクハミクイハ、菅家集ニいそになるノ哥ニ
テ考レハオヨロ海上ニ小山ノ加クタツ大波
ノ末ノイワキハニシケクテヒサクヨルモノ
也ソレ故ニナコロトナミトフタツニヨメル
也サレハナコロハ涛ノ字ニテアタルベキカ
○八雲抄 浪なごりをこそなごろといふ

古今春下 貫之
さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける

拾玉 二 海路
うき枕なるみのなごろのほどふけてともの浦風うち吹けば

同 七 海上霞
おしかへし霞になりぬ難波がた汐のなごろは春ぞなりけりして

為忠朝臣家百首 為忠
なごろなる川いそのみかたに人めをもしのぶ心にうつるふなとし

元真集
伊勢の海のおきの汐干に春風になごろをとゞめんかたもあらむ

同
伊せの海のなごりをとゞむるあまもなし思ふといへども帰し

○伊勢物語 浪のいとなごりしとあるを 六条本ニハ 波ナ
コロ 駁盧とこそなし○

なづき 名簿
宇津保 蔵開君 さき／＼なるなづきをまゐらせたまひて○名
簿書様台記名簿記等ニ見ユ○宇治拾遺 なに
らふとて人のかたにかきたるに名簿をなる事ありけり
○後撰雑 二 としごろなまちかき所にすみ侍りけるにおなじ
かたらひて兼輔朝臣の家になづきをつたへさせ侍りける
にその名つきのうらにかきてかへしつかはしける 𛀙つ枕 ○ 是ハ

弟帰オモ没ナル故ニ貫之ヲタノミテ名簿ヲ
オクリテ名マヘヲ通シオキテ見セヒトセ
シナ○今昔廿四 十六 今ヨリ偏ニ御弟子ニテ候
リ公トシテ忽ニ名符ヲ書テナム取セタリケル
○同廿五 九　○古事記六
○延喜式　○後拾遺雑三
○続世継 ゑあはせのうへ

なにう ナミヤカヤ也
中務日記 なり一ちとくせんともたてなにかしのきし 為
もかきりあるもののあはれなりきこえ○

なの花
草花 月宴 三ウ なの花にあさけありて○同 荒山 卅三 なの花たれ
さけありて
夫木廿二丁 光明峯寺入道摂政
月影にあはとよ明りの花見えてなの花にかをるさかりなし
拾遺愚外下
ふるひのそまやかきりの花吹くて夕の花ちりけるなの花あり
○俗譯 オホカタ○

なのる
壬二集上
ゆくさきもとそ名のるまつかせであさくて山のさくらきたり風

○山名のうの詞いり山家い松高風有一声秋の句意ゟて
ら侍きし例りへりきしもちゟて無声外よた可ほくなのると
とみしい其鳥の声めなれり名をよろにちるゑと
まうめらに云り 鳥丁雉鶏鄗子彰例り

拾遺恋 草上九十
○枯原ぬと荻の葉風い名のうこ人ちゟ とこ秋ゑらかましの辰

雑 経集 花鳥月集
朝ゑつや床の九段にゑまとへい枯そも なのる ちきのうえ風

なそて

夫木三 光俊
○玉ほさいの道のちなて枕ましぬたや とうに縁まし ゑちらしやまん

なまる 訛(ヨコナハル) 日本紀訓○東人(アヅマ)ハ声ナマルモノ也

金葉 連歌 かゑりける都の北のうらに声なまり鳥人の
物いひけるを聞て 永成法師 あつま人の声こそきたに聞ゆなれ
律師慶範 みちのくよりやこしへきらん○

なるさは 鳴澤○鳴砂

長秋詠藻下右大臣家百首 五月雨五首中
五月雨は鳥の羽ならちにしてなるさはふしのねにかゝりける

○長明無名抄上云 五条の三位入道は此道の長者にて
いまはうきましふしのなるさはをふしのなるさとよみて
なるさの入道名頃しの大将とつまこ人にもうもまれひ

しるべなき山道の遠眼ありて行ん何しおかく道
ほとゝきすなくなる声はあしたのさくらにさそ

○

なかとり　名折カ其モノヽ名ヲクタス義之

拾玉二 秋
なかれのとは あきはぎの花にはいつきのなかとりのねにそなくなる

夫木十

○盛衰記 十六 満仲不及力サテ止ヌ哀ノ人ア
ヽ源氏ノ名折タリトモ云ケレハ○同卌 平将軍
貞盛ヨリ武勇ニ携テ八代未一度モ名ヲ折ス

皇家卿家哥合　資隆
かたらひて山ほとゝきになかなかはなかとりの名をたてし

○

なかうち　四言

ナカヒト
ナカタテ

昊異記

○催馬楽　浅水

○続古今　年をへていはふなりけりとなりて○林葉集　失中人哀

かさなきてなかなかうちなかの人をいかゞ染し人の

かこの袖　中子日之

後拾雑四　ねのひ中の子日といひけるをとて　下野　ちぎりのなかし

○

まさきをふき川しいそんかくなりつゝ中の袖なけれぬらん

かこくし　長橋

業平　くまはの川はし　君かなとたのしもえてみなこのえしの何に

新六　あとつ海　光俊

この世佛へまし　くちはとも

○

のちかけのきりたゝのちかくし　そうもあま川つ袖ても涙かあまらま

かゞしく

金葉上　橋季通

袖中十六　同

あきもいくさゝちにおちてあやめ草あはれかゝくさつきはなしらん

○

かうち川

竹取　玉の枝をとく岩ち川にまてそのかほひて持て来る

○土佐日記　あさいかして高くたえて川の海のも　ひとものとも　かうち川にみかひつけておちはるり　○業平

玉葉

かうち川といふものにほくれをのさうしるのとて

きたりまたし〇今昔廿六 九 長櫃二ツ荷テ持来
タリ〇同 同十七 長櫃ニ火多ク入テ疊厚ク敷タ
ル二菓子食物ナト謂タル様微妙也〇讃岐日
記 長櫃にちゝやきるものともちらしのかはきうたるうた
のさくそくの出しきを入てもてつきたる〇増鏡 烟まこ 苔の店
めさくそくうれしかもしにいそきらるる十月もなりつつたに
なかもち川ぞて左衛二位のさうしにおくるとあ〇

なかもち
菓苑 若枝
なかもちもち川のふねにいと ありわしうらあ

みえて〇宇津保 国譲 上 長持の足付たる三〇

なからひ 間 善

隆信集哀傷 あましめ中らひけりて 父子ノ間〇枕冊
子 廿八 中らひいとみえしいを成 行ニイヘリ 成ト清 廿ト也〇

なてもの
続千 釋教 鳥羽院御時 御なてものの経をあまひて 巻
しかるる
源 東屋
みし人のかたしろならはみにそへてこひしきせゝのなてものにせん

同同
○みなき川せたにいさきん あて物を身にそふらけと なまらか枕さん

あくらさ
赤染集三 四月七日なかれたる人に言とて
うらの(の)ふかき人かちきめ心きかへて君を思日いつそとも知し
拾玉四
かふそか一あ川なき色にせつてあきて千代の(の)おとの海なかん
○

あくえい
催馬楽
続世継六 たかのうちき
清らく見て海川ま脇とし(ら)(ら)紋も

なきはうすうあかえいなときさうえて○

あさま川
万十
うみ山あをあ見つ路のおもふ人いもうち思ひしをねきて忘しも
拾遺雑賀 定文
ちきらせいたらにいたらて思路のつまうちき清きあさま川とさく
○

あ海しひ
万四
ゆふみくしくに見えしく奈麻強につ袖を思へとわりそく袖川る
射恒集
あら玉の年わ四とせをあ海しひみ身をとをてきみよひつそとし

○

なこうは　波数

曽丹集
なきの海に恋の波はうち寄する　あなたの岸を見る人ぞなき

後撰恋三　（なに人なれは）
浪数にあらぬ身なれば　住吉の岸にもよらず　なりやはてなん

同　伊勢
住の江のめにちかゝらば岸にゐて　波の数をもよむべき物を

○

なかゝ

衣の袖下　ほそくなかゝ君て○源　なかきて

夫木卅六　後鳥羽院
ふる里の月吹風になかゝりけの　なかゝりあひても　いく世へぬらむ

なりあふ

成合○なりしめうちあひたるをいふ

源　松風　いとなりあふまじき御中の　なりあふべきに　なりたひにけり○同　宿木　なきほどに　なりあひたるさまも　しるべも○同　なきなくなりあそめ人を○

ないかしろ

五言　蔑如（ナイガシロ）

六帖題　ないがしろ○枕冊子　ないがしろなるもの○源　帚木

十六

かゞちとり　長篭　河
源　りけろふ　かゝちとりしらんもしらん那し○

ナカヤト
かりやとり
源　夕顔　○同　富木　ゆきうつりの中やとりにい
拾玉四
郭ゝとりの桜が見ゆるしに中やとりしるまゆのうつも
○

かきけれし
きのふ祝下　かきけれくみちてもいきての出るへき○

かくあそひ　七歩詩
拾玉一
うつ岡にかくあそひせしみちのうの時にゆきてちりはてぬるを
○

かにとうや
千載三　忠良
あにとりやきのふにいおとこちの新猶にきけるきのかえうき
○　忘草
拾遺物名　ナリ
かにとうや　うくひすき　なけみ
うきのなかくいかも不えてあやしく花の名さへそ忘るれ

正治二年百首
なにとなき風にさそはれちるはなの名にたちきてこゝを染るともなく
新古雑下　皇嘉門院
何となくきけは涙そこほれぬる苔の袂にかよふ松風
源　後撰集
何となくはるのはしめかゝつあはれしてなにはなる
○
なぬかのやむ
業平　うらしの別　四十五
ちとせといふなぬかのやむといふんなうに○
なほしゝよ
狭衣一下　八
九月ついたちころなほしゝよれるに中将の
君中納言になりたまひけり○縣召除目にいはく落居
めすちを書なほしにて○源　為木　きこゆきのついたちなほしに
なほしおかしくいふによに權大納言になりたまひて○　河
除目直物縣召或京官除目以後執筆直物を申行
也或除目以後兩三日をへても猶也先度除目に
參着の事なとをなほしなとに直物とかくなす其次に書入
ることなりし○江次第廿四云直物者除目之時所
給於二省之召名中有失錯之時大臣着陣令參
議改直件召名也上古毎年除目訖一月中行之
中古以來不必行之其時召出年々召名而悉改

之共失錯者外記作直物勘文奏上也此次被行
小除目叙位女官除目叙位等有無不定也

なほさくし
詞花集
さとわかて なほさくしくなる 名の露に うきそたちぬる ことのけさいつまて

〇

なほすはしに（ヨフ冗 成就）
拾玉一
山ふかみ 苔しきさとの あはれとい ひしおほせ身に しもなれ

〇

六言

ぬれ衣
後撰恋三 野遠来女
つらからぬ 中にあるこそ うとしといへ 隔てはてつる しきぬなれ
拾遺恋三 （なきへたてつる）
衣なに 中のなしいろかりき あさなさなとて 隔てつる中
空穂 あて宮
あはれにて 月日へをつる 夜中に 衣をかくしを のこしみなし
同 藤もゝき
なき人の おほくの日をへて 身をやつしても 時いつそも
源 まつり
あさなさを 隔てつる中の 夜半に 身を経ていとゝぬれてや
同 紅葉賀
つもりける 名をうき出くし かくなかろ ふる中のさかしに
同 あさき
あさ御くし 隔てゝりぬれに なをかき経まぬつに 解きし中の衣を

同あかし
こゝみなをたえへける あふとの月影なをてそ 中のちかひを

同やとり本
こゝろをつらぬ中に 我しらしをかくて みゆきはうけてのほりなん

○

あきにあふ

万代恋五　梅壺女御
きてもなに うちそへてし 人の身は あきにあふてそ なるやうつる

あきのくさ

拾遺雑下　恵慶法師
種ありて あきのくさは おひにけり 何しておはしけるに

同雑春
さくら花（うつ花）さかりになりに あしきみは あきのくさは思ひそめし

○家集 くさあそせ 何不 ○契沖云 あきのくさは無益 といふことにや 語不定○

あかしの月

拾遺哀傷
つゆなるも あかしの月にあはしきは 思ひたふとの あきにそなる

同同
人はいさ あかしの月そ あの浦に 世の さきにそ なりやとて

○

名あきのゝ帯

源若菜上
さしてくかきりなくさくらをつくしてなみのうき
わきかへる涛をわかれと○河高名録云韓将落花形無無
生角鵝形雲形鶴通天鴛通天○細石の
帯也○すゑ保ちもおとゝの涛もとにあゆの涛時
なりつきしつをたまへる名なるきおもむきいえんにさし給
へるかたにに一条殿あきふたりける○源紅葉賀
涛さくしあつた名なるき涛あかたしきかせて
ゆかりなひて涛の涛しろいつくろいぬと○

ちかのやしろ

新古神祇　慈円
わかたのむ七の社のゆふたすきかけても六のみちにかへすな
壬二集下
千はやふる七の社のちかひにはあまをさへてやたのもしからん
堀後百　後頼
いのりてもかひのなきしろかなしきはあしわきせをくはなしるらん
○

ちかひの神
夫木卅四　慈鎮
二ゆきやしらせの浪とちかひしも神は誠をまもりけん
同同　祝部成賢
万代の末にもあかし八まきのちかひの神のあはれみ
続後拾神祇　祝部成久
ねかひにいのるまことをうけてこそちかひの神の世のまもりして
拾遺愚草上
ちかくるちかひをたてしみそきのしるし日本の世のまもりしろ

七夕七てウツ

○

あまはた人

尚蓮筆記

ちる花はかし（仲澗）らの雪となりぬらん あまきれ人のうらやはしきに

○

あまのはら

拾遺雑恋 いにしへのほかくした女のあとてつきつけて侍る

あうへしは

渡のあと見てあはぬは山あまのはらそすしとそん

○枕冊子 うつるきよめ あろいひとむかしはるてしいくし

そこ色はなくして女四色はこえにしあかけりうら 見もいは 又のこと

あれ山は山の峰 ゆくへし

続古賢 大峯より ちる色のなしの川はらへくし 後拾遺 見かやまとのおもしきれ

コレハ大峯ニ七夕七ニ○

ウラミ行カライフカ

あさしをうは 縄 歌

うたる保 後京兆

あはそのとも 不熟者

源　玉かつら　たかぬあまそめしものあはれつきもしらぬも

かなしけれきこえて○

あかたしのほ

長明無名上　九条殿太政大臣の時人々に百首の歌よませ

られし時　伊豆守仲綱の歌にあかたしのほりをよめ

しかば大政入道きゝて　かゝる詞をよむ人こそ　百千の歌

をよみたりとも　いかで歌よみとはいはん

和泉式部集

あかたいゆもしもそ　あるらいはさつかなん　おもひやるかな

○

あかほら

狭衣　一上　廿五

七言

あか川のみなかみ

宇津保　祭使　清らかなる白妙にいきほひて七のみなかみ

たえるんたゝゆく　ちえ　あさし　まれなりし○

あかのおいらく　七要

尚歯会記 素経
たまたまにうけし事をいつまでせのミじかくもちろをとなる

○

あこやの玉 七 曲玉
久安百首 清輔
ちぎりおきし[illegible]にし[illegible]をしめ[illegible]を [illegible]といゑて[illegible]

家集

万代集二

○枕冊子

八言

あだへなる人 今俗ニイフ似タモノトイフニ同シ
挟衣一上 九 さうしなどへなる人あらんと○

九言

あいなう婿めかしき
[illegible]日記 内々婿の事なし世人に似ずまう○

あそくそのかたり 謎○隠語○廋詞
拾遺雑上 あそくものかたりし[illegible]て [illegible]のもしるし
[illegible]いえていそしろのむすびなちとせをふるも誰かとくべき

○枕冊子 あほいとめて[illegible]
あそくあそせしける所に

散木七恋上

○実方集 小一条殿の人々あそくそのかたらひに

夫木竹 天元四年四月小野宮家歌合 あそく いはねのあひたるもの河とも 読人不知

秋(?)はさぬいはかしえしいちとおけの声さきに花さはにさくらそ筆

にの部

一言

荷

万十八

つなの意はいまさ宮海ぬにこそおもふうらにおひには宗奈比本こんし

散本家編政意

意しさそとさしにあつめる船ほきはかちしえとろし さくらせも浪

○

二言

二字 部名簿ノ事之トカホシ

古事談三 一門子息筆献二字於僧正仍被免

之後存命之々〇同六乞返二字退帰畢上二 名簿
ヲカクル
ヨシアリ〇實名多二字故語之二字〇明月記
天福二年七月廿七日山門好士沈阿闍梨快明
以春日三位相具二字未称病不逢返二字了明
快座主名字為山僧可憚哉如何〇通證一 彙言 廿一丁
可考〇

菜にて 懸居説いふ也〇に助辞
大和物語山をそむきてのかれんと思ひ又てか(?)る也〇

二七草
二七手枕
二七菜
二七若草
二七紫

にひ菜 新
和名 新川 ニフカハ
万 みくまりにおひ茂る…(?)
同十一 わかくさのにひ手枕をまきそめて夜をやへたてんにくからなくに
夫木二 忠定 …せしにほえのうへかつ…のにひ葉のあさみどりなる
同同 為家 春日のゝにひ若草につれられて色ちも…あさる春駒
同六 禖子内親王家 歌合 中務 …もなく紫のねすりの衣…
〇

三言

にあふ

異本堤中納言物語　かくてうれしき人はみきちやう
ほとのほかなるちにあまひ見ゆへき人ありにちやう ○ 水鏡
跋文 世あまりきえうしなひしへの大鏡なとい見えてのき
おきなるにおろし似たるて詞のみしくさうともおほくし
て見るも作り ○

にかい　二階

蜻蛉日記　そのうへに二かいを作りけ ○ 同所の上にて
見るけなる二かいのさま作りし ○ うけうて　うちとけたるところつけ

て二かいにおきなり　これは二階厨　子十ルベシ ○ 源 東屋 川し
二かいなとあそしきほとしくさく ○

にきみ　瘡。和名瘡 唐韻云 ー 尓岐美 小瘡也

栄花　くものふるまひ　肉ににきみおほし出してくるしみ
なりれとして ○ 同　根合　肉の詞にきみなとなほあさ
あかせ給ひし ○

荷鞍 ニクラ
為忠後百　仲正
あさなちに刈のみくるにいそきあはてきてあはせつる時なれ

丈木廿七同

○

あけ烏 迯目

源 宿木 あけ烏をつくりて○今昔卅一卅一迯目ヲ仕

ヒテ○

西日（ニシビ）

栄花 玉臺 西日のほとたはまたも湯あみの家とのとも ろくのみすしのうちをのとしきらめきて○

ふたあふ

林葉五 あちきなしやきらうふるみさ床を法の庭にふたあひのきさん

○大和物語百五十段 わしふたあひなる男の○

フタマ
一の間

二の間

源 若菜上 そしろたしの二ある間の東のそばに○花 階より西にいでまして 二間にわたる東の柱のもとによりて

○細 階の間の二間めぐ○讃岐日記 清よつらい人をもち 川もてて一ある間ない出せし[illegible]○

センジモノ
煎物(ニモノ)
今昔廿八(十八)皆鍋ニ切入テ煎物ニ艶ス調美シテケリ 中畧 此和多利ノ煎物ヲ温メテ汁物ニテ食セタレハ○同卅(十二)煎物ニテモ毋シ焼物ニテモ美キ奴ワカシ○

如意(ニョイ)
北山卅ノ釋奠ノ次ノ日明経論義ノ所ニ博士ノ如意ヲトルヿミエタリ○

みちふ
竹取 みちくし みちかちきて 家に入りぬる○

四言

みぎし
愚管卅五 康頼れしいふさるうかうひ者れしみぎしとえしつうきて○

みくさげ

大和物語 いとみにくげなる女のあるを 醜○

にくさみ 未詳

万代雑四 能因
夫木廿五 同
みくさみそかくへうつるあしたてゝ わたる川をこにいさき 袖まき袖

○能因歌枕云みくさみは舟に綱つけたるをと云

小町家集
うきめのみ おほくの海もさはりして みくさむすびける あまのつり舟

○同 長歌 瀬々にかゝる あし河の 大君 あふきよる 浦ちく わかめ ぬき 大君十七

なかれいかのうき世の みくさ くさきぬの あかすみ たかけて かけつゝ 世には 思

ふとはなき身とは なるべき ○住吉物語 もきたうかきくる

わかいあやしきすみてみくさむすびけるは とよみたりしからは

うたよみしうけり○

みげづく

源氏玉かづら したにみげつゐるもしらぬ人のほんかりけり○

似氣付○

みだりう 深

天菱竟宴歌、天稚彦哥注 その空にちみだりう 矢 血 深

○書記ニハ千ワノヤニヌレタリとあり○

にの人

栄花 八 月宴

九条との二所人見て おほえはましと あほ一ふ

き二のとそ人に思いきこえさせ給める○

二のまち

源 帚木

さまい二のまちの人やはきをへし○ 二番ト ホリ ○

二のまひ 二ノ舞

栄花 衣珠

まひは二みつまひ見て人の清まひをと思はれ

ぬつきうちをしきさ○盛衰記四十六 鎌倉殿蒲冠者ニ云

和殿トテモ非可打解九郎カ様々二ノ舞モヤ

ト存スレハ上洛ノ事暫可相計宜ヿ○

庭のり

盛衰記十一 随身清房カ三黒ト云小馬ヲ賜テ

庭乗仕リケル程ニ○

みたきさ

為忠後百首 取祭 為盛

おもしろやあちしやまぬみそきのそこすゑもとにふれる白雪

入調

続世継 ゑあそせの云 大食調ノ入調ヲ○古事談六

同

入湯

中務日記 ついてみちとみりさうして家へ帰りつきぬ○

入麺

中御門宣胤卿記文亀二年正月廿五日云々賜

入麺天酒等○

みほたれ 諷

○源 角従 君まちあはらかへもしく竹見とうかろふ

うきことにみほたれしかきてしうえ○

みほつきり

後撰春上 素性法師

う鳴の花をまこいさほまぬる袖に匂ひ香うつせ家つとにせん

六帖 みにつくり

○

日蝕

拾遺雑恋 日蝕の時 太皇大后宮より一品の宮につ
かはしける

あまてるかみていひみつゝみなれぬひとてぬ人の見えにい

山家集下 月蝕を題にてよみ侍りけるに
忘れいて影にあらはぬ契りしも心まて月みる名を惜ちぬらん

夫木 十三 同

新後撰雑上 妻の代月蝕を祈てよみつけ侍りける 法印能海
うれしさにかつくしの空の月ぐもりまたいのるかひもありけり

○東鑑廿八 十四 今日可有日蝕之旨宿曜備中法
橋依申之可被裹御所否○

五言

にほふさくら
後拾春上 通宗朝臣
六帖題
後拾春下 和泉式部

にほの海
歌枕 鶴林 みその海にふし滝ろふ○同 題 みその海
にふし滝ろき○同 あふして 道の海にあふうせまふ○

二万の里
金葉 賢

人非人
長明無名抄上 さうしこの人非人ゐつゝゐりて○ 法華経に
人非人とあるハ人と非人とく非人ハ
人類にあらぬ属をいふ ○

女房
妻ヲサシテイヘル例
住吉物語 みなしほりのうらにおもへしあまとて三の君をさそ

しかんところみて 少将ノ妻 三君ナリ ○盛衰記十僧都ハ
究哀ヤサテハ女房ハ早ハカナク成給ケルニ
コワイフ 妻ヲ ○同廿二土肥女房ノモトヨリ消息
アリ 妻ナリ ○

六言

みかしーー
小嶋口号 行一日 定くなみかしーーくて兵杖いあけぬ
○同 あらたいみかしーーしめきて○ こめこ給上 殿に
いみかしーーきもしくおちたへて○源 あ川きにとゆか
ニカリテ

みたくハ○今昔廿八十極テ若リテ此モ彼モ否
不云テ居タラムハ○同 同卅五 皆若クナリテ止
ニケリ○水鏡 下 光に さとにまかりて思ひまどひ
たまふほとに○

二相(ニサウ)の人
濱松一 浄子母后にやまふうつり二相の人似とおどろく
しう人のいひし待るもむかししうぬ身にはなほ似る
宮に侍まへん日ころいえやまにきこえしかつらい日本の
人みてのみん侍りし○

みしのこゝろ
菜花玉墨 池水にうつるありあけの月をみてみしの心かりを思ひやる
○
みえくれ身 蜻蛉
保憲女集 むかしは見えかくれしといひふるの涯縁をとして○
同 みえくれ身 物名 ○ 和名
みえのをしへ

万代雑一　入道前摂政太政大臣

ちとせふくさひの花のかけしけきしぬ夜の跡をたつねて

続古哀傷　同

○

七言

二月五番

後拾遺雑五　きえの山に二月五番とて花折しつること

作りける○李吟排云なりいえて山の人もしられとて○

みへのかりのき

散木集隆源法師のもとにまうてしはなゝかり

まるとてあさまうてきにうきつれるに

かきてみるみえかりあきにおる窓にもあれて人にしれ

返し　隆源法師

たかりのみへのきよけのつらをしはらけにまたいかゝきかん

散木卅六

○東鑑十五　廿八　但神社供税贄鷹事者非御制之

限○同四十　三十　諸社贄鷹外禁断之處

十言

みきそのみしきく

夫木 十二 秋田 為家

○ 昨日こそ神田のさなへとりしかと今朝[illegible]